



吉塚ゆりの樹幼稚園 理事長
玄海ゆりの樹幼稚園 園長 高杉 洋史

十月の誕生会です。玄海ゆりの樹幼稚園では、園長先生のお話の時間を五分ほどもらえるので、季節の話をしていきます。十月は食欲の秋の話で、特に秋に実る果物を子どもたちに発表してもらいました。もちろん元氣よく答えてくれます。その中に栗という答えが出たので、脱線しました。「栗といえばドングリを思い出すよね。ドングリのドンは何か知ってる？」調べもせずに余計なことを言ってしまうました。「栗のようにゆでたり焼いたりしてすぐに食べられないからなんだよ。」そうしたらこどもたちの中から、ずっと水で洗ったら（水にさらしたら）食べられるようになるんだよとの発言。確かに縄文、弥生時代始め、江戸時代でも飢饉の時は食べたようだし、自分だって椎の実を食べたものです。そしてダメ押しの発言。「マツボツクリは栗じゃないのにどうしてマツボツクリ？」「あちゃー。わかりません。」園長先生もわからないから調べとくね。というところで園長先生のお話は冷や汗ものので終わりましたが、そのあと検索性トにお世話になりました。

ドングリの名の由来 ドングリはコナラやミズナラ、アラカシやシラカシ、クヌギ、カシワなどの木の実を総称したもので、ドングリの木という名前の木があるわけではありません。ときには「ドングリの木」と呼ぶこともあります。この場合は、一般的にクヌギの木のことをいいます。また、このクヌギの木のドングリは、ほかの木ものと区別してオカメドングリの親である木のことを申しあげます。これはすべてブナ科に属する木です。材質が硬く、木目が美しいこと、薪や炭の材料、シイタケの原木、杭、神社の鳥居などに、それぞれ利用されています。木ごとを使い分けられ、利用されていくうちに、このミズナラは耐火性に優れています。このうち、これは材が水分を豊富に含んでいます。そのため、そこからミズナラの名が付いたのです。

ドングリはリスやクマ、サル、ネズミ類カケスなど、山に棲む動物たちにとって大切な餌となりますが、昔は人間もドングリを食べていた時代がありました。渋を抜いて実を食べたり、ドングリ餅にしたり、あるいは飢饉などに備えての非常食として利用していました。ところで、ドングリの名前の由来ですが、これには二つの説があります。ひとつは柘の木の栗、「トチグリ」が訛ったという説。もうひとつは、昔、子供たちがドングリをコマにして遊んだことが由来という説。なぜコマと関係があるのかということになります。ひとつはコマのことを「ツムグリ」と呼んでいた時代があり、そのツムグリが時を経るにつれて次々と変化し、最終的にドングリになったというわけ。由来の説としてはこちらのほうが有力なようです。ところで、漢字では団体の「団」に「栗」と書きますが、これは当て字だそうです。

樹木図鑑一葉・実・樹皮で確実にわかる
(実用 BEST BOOKS)

来月のお誕生会で謝りながら続きます。話すのは当然ですが、問題は「マツボツクリ」のクリです。植物の名前は結構すごい名前が多く「おおいぬのふぐり」とか「ままこのしりぬぐい」とか、かわいげがあります。「まつぼっくり」の「の」が「あり」になります。「の」にも仰天。この件はご自身で調べてください。

樹木図鑑―葉・実・樹皮で確実にわかる
(実用 BEST BOOKS)

Photo by
Hiroshi Takasugi



保護者の皆様へ

♪ ゆいの樹通信 vol. 4 ♪

吉塚ゆりの樹幼稚園
園長 高杉美稚子



1、やり遂げた達成感いっぱいの園児の笑顔を出しながら・・・

「どんな物でも何かの役に立っている。この石ころだって、空の星だって。君もそうなんだ。」

終わりというものはない。始まりというものもない。人生には無限の情熱があるだけだ。

始まりと思うのも自分。もう終わりだと思えるのも自分。」

フェデリコ・フェリーニの言葉

映画監督であり、脚本家でもあるフェデリコ・フェリーニ氏の言葉です。

コロナ禍の為に、分散開催になった吉塚ゆりの樹幼稚園18回、玄海・地島7回、計25回のスポーツフェスタを振り返りながら思い出した言葉です。

前にも書きましたが、私は、怖がりの臆病です。だからこそ、園長になって37年、理事長と共に今までに実践してきたことは、石橋をたたくように、慎重に慎重に、そして、先を見越して出来る限り後悔をすることがないように細部まで丁寧に煮詰めて進めてきました。

だから、今回のコロナ禍も、25回のスポーツフェスタも怖がりだったから良かった。だからすべて実行できたのではとも思っています。その意味で、人の欠点は見方を変えれば、良いところですね



一人の人の中に長所と欠点が両方あるのではなく、他の人から見ても、自分自身のことを捉えるにしても、長所になるか欠点になるかは、どの方向から見るか、その人自身の生き方であり、その時の視点の違いです。



我が子、家族、人の悪いところにはばかり視点を当てていると、相手ばかりではなく、自分が苦しくなります。なぜかといえば相手の欠点を見つけるということはその欠点を自分が持っているからです。自分が相手のことをわがままだと思うか、自己主張がきちんとできる人であると思うかは、自分がその行動をどう捉えているからです。

自分がわがままと思う時、相手のわがままだが分かるのです。相手の中に自分のわがままだを見るのです。そのことを良い視点からとらえ、そのことを悪いと、嫌だと思っていなければ相手の中に見出さないからです。自分の考えがきちんと述べられる人だとむしろ良いことだと思っていたら相手の人の行動、言動も良いように見れるわけですから。だから、相手の悪口を言うことは、即ち自分のことを言っているようなものです。

私は、人は客観的になることは難しいと考えています。なぜなら、そこには必ず、自分が見ている世界、聞こえている世界、感じている世界があり、その自分の世界を通してでしか、相手を見れないからです。

必ず自分というフィルターを通して見ている世界なのです。そういう意味では、客観の世界はなく、すべては自分というフィルターを通した主観的な客観なのです。昔「世界の中心で愛を叫ぶ」という映画がありましたが、このことを言っているのかと、題名を見た時に感じたことを思い出します。



人を批判するときは、「我がふり直せ」の時かもしれませんね。ただ、多くの方が、それは直した方がいい、行動変化した方がいいといわれることには耳を傾ける必要があるでしょう。多くの方が考える主観の先には客観があるからです。これが、世の中の約束事、規範になってくるのでしょう。





さて、本題のフェデリコ・フェリーニの言葉です。私は臆病の怖がりなので、悩んだり、落ち込むことがとても怖いのです。だから苦しくなったら、悩んだら考え込むより手を動かします。

コロナ禍も重なって、家にいることが多くなりましたが、以前より、悩みがあると、ピアノを弾いたり、手芸をしたり、絵を描いたりします。臆病な私は悩んで落ち込むことが怖いので、何とかそこから切り抜け、抜け出す方法を考えるわけです。



もちろん、心理学を学んだ人間としては、かっこよく、「マインドフルネスで、瞑想です」とか言いたいところですが、元来、行動派の私は、じっとしているより、何かをしている方が気分転換、発散ができるのです。むしろ、何もしていない方がストレスになります。忙しいことの方が楽しいと感じるのです。

フェデリコ・フェリーニの言葉には「**人生は祭りだ。一緒に楽しもう。**」という言葉もあります。そういえば、スポーツフェスタ今年は25回、分散開催・・・と放送した後、フェスタが終わって本部にお礼に来てくださったお父さんが「美稚子先生 25 回お疲れ様です。でも美稚子先生は、ちっとも疲れた様には見えませんね。むしろ、生き生きと楽しんでおられますね。」と言ってくれました。嬉しかったですね。



時は戻らない。だからこそ、同じ時間を同じ人と過ごすならば、最後は楽しんだ人間の方が徳（得）だと私は思います。嫌な時間は長く感じ、自ら楽しんだ時間は短く感じます。もし楽しめない時があれば手足、体を動かして、体ごと楽しいと思いつくのです。

頭より、身体の方が正直です。そのうちに不思議なことに本当に楽しくなってきます。人間は内面はなかなか変えられないけれど、行動は変えられます。行動変化（**エクステンジ**）です。人生は楽しんだ（**エンジョイ**）もの勝ちですね。苦しいことや悲しいことさえ、泣きながらもそれを乗り越えたらどんな自分が待っているのだろう、どんな新しい自分に出会えるのだろう、どんな景色が見えるだろうとドキドキの不安とわくわくの期待を持ちながら・・・



だから、ストレスの解消方法は人それぞれでいいと思うのですが、さすがに、今回のスポーツフェスタの連続の中で、何かをし続けるということは、無理な時があって、映画を見るという新しい趣味を見つけました。その中で、映画監督や役者の言葉に興味を持ったということです。

「一つの区切りとしてのスポーツフェスタ」は終わりましたが、フェデリコ・フェリーニの言葉のように

「終わりというものはない。始まりというものもない。人生には無限の情熱があるだけだ。」と本当に思います。これからも園児たちと共に、一つ一つのことに情熱を傾けて同時に慎重に、冷静に取り組んでいきたいですね。そして「**どんな物でも何かの役に立っている。この石ころだって、空の星だって。君もそうなんだ。**」の言葉のように、全ての人に、全ての出来事に失敗はない、人生に不必要な体験はない、不必要な人間もいない、必ずどんなことにも意味がある体験、出会いであることを信じています。

始まりと思うのも自分。もう終わりだと思うのも自分。どんな体験も、どのようにその世界を見て、声を聞き、感じる自分にかかっているか、それを決めるのも自分ですね。スポーツフェスタは終わりましたが、これからがまた、**新たな日々への始まり、教育はプロセスが最も大切であり、園児たちの教育は日々の流れのようにエンドレス**です。

また、ある女優さんの言葉に

「エールを送ることは、頑張ると、声をかけることだけではない、大丈夫と気遣うことだけではない。隣で、お互いがお互いの道で、頑張っていることが一番応援している、エールを送っているという別の表現の仕方となる。どちらかが、元気で頑張っていればいほど「自分も、よし、!元氣になろう」という力が作用する。

「しっかりして」とか「大丈夫」とか聞いたり、言わなくても、自分が夢中で頑張ることが、お互いに対して元氣に頑張ろうねと励ますことになりえる。



大変な時も、苦しい時も、といえず、自分が精神的にも肉体的にも元気になれば、相手も元気でいてくれるだろうとお互いに頑張れる。それがお互いに伸び伸びと明るく、リラックスして楽天的に頑張って、自分らしく、自分の戻れる場所に戻ることができ、悔いなく生きられることなのではないだろうか」

という言葉がありました。

この言葉は、愛と思いやりを伝える力と同時に、時にただそこにいる、自分が頑張る姿を通して、黙って背中を押し、エールを送り、共に頑張りと、支えあい、見守り続けることが大切ということを伝えてくれています。今年ゆりの樹通信スポーツフェスタ号に下記のように「がんばるき」の意義を載せました。

【がんばるきの意義】

「頑張るということは、一人で我慢して、やり続けることではなく、人にかかわって、自分や人のいいところを受け止めて、『ありがとう、ごめんなさい、わからない、教えて、助けて』を伝えて、人を支えて、人に支えられて、助けて、助けられて、置かれた場所で今、目の前にある自分で選んで決めた道と時間のプロセスを、人と共に夢中で楽しんで、精一杯取り組み、自分らしく生きていくこと。」



そして、いつか、時がたって振り返った時、私よく頑張ったなあと思える自分がいることが本当に頑張るということ」「頑張るとは無理して一人で頑張らないこと、皆で支えあうこと」人間は家族の愛、友達や社会の「人と人とのつながり」があるところでたとえ一人でも、へこたれず、諦めず本当に頑張れるのだと思います。

行事を通して、グループ、クラス、学年で「心を一つにする」とこんなに気持ちがいいんだという体験も重ねてほしいと思います。その為には、保護者の方の温かい見守りと応援が必要です。人と比べる相対評価（横の評価）をすることなく、我が子の昨日から今日の育ち（縦の評価）を認めて、受け止めてあげて下さい。と共に我が子の成長の為には、お友達の成長は欠かせません。縁あって、同じグループ、クラス、学年、幼稚園で出会ったお友達の成長も同時に願って下さると嬉しいです。



友達との絆、家族の愛と見守り、応援・・・同じことだなあと25年も前に聞いた女優さんの言葉思い出しました。そのような懐かしい映画を楽しみ、ストレス解消もしながらコロナ禍の中での8月に始まり10月に終わったスポーツフェスタ月間でした。

私は、園児、保護者の方、そしてゆりの樹幼稚園に関わる職員を含んで、全ての出会った人と共に心が響き、「あっ」と驚く 三つの教育(共育・響育・驚育)、その為の環境を整え、保育を立案し、行事を企画する「感動プレゼンター」であり続けたいと願っています。

人、特に幼児の記憶は曖昧。だからこそ、思い出の中の自分の心に触れたかけがえのない大切なところだけが深く心に刻まれる。そして、いくつになっても鮮明に思い出される。だから美しい。だから尊い。

そして鮮やかな新しい景色となって次への原動力となるのだと思います。時にその息吹を感じながら・・・。

だからこそ、園児にとって、出会うすべての人々にとって、ゆりの樹幼稚園での原風景もそうあり続けたい、と願っています。そんな次への原動力となる心の原風景の一つでも多く残してあげたいと思います。

そして、やっぱり、最後に感動をくれるのは園児達と、職員の真摯さです。それが私の無限の情熱につながっているのかもしれない。

これからも、先人たちの言葉に触発されながら、学びを深め、自分の何を大切に生きるかという価値観と事実を踏まえた上での直観を信じ、園児たちの為に心を尽くしていきたいと思います。

そして、コロナ禍の中であって思うこと、当たり前が当たり前でできることに感謝することはもちろんですが、コロナ禍の中で出来たスポーツフェスタであつたらからこそその感動であつたことも大切にしたいと思います。「できない」ではなく、常に「困難な時だからこそ、今できることは何かを最大限に考えていきたい」とも思った数ヶ月でもありました。





また、タオルを固く絞って机や、床を拭くことが当たり前だった 1 月、コロナの感染を防ぐ為に、あれから全て、ペーパータオルに変えました。はじめは環境破壊に繋がるのではとの思いや、「もったいない精神」から、ペーパーを一枚一枚、大切に使っていたのが、たった数ヶ月、今では平気で 2.3 枚どこを拭くにも

使うようになってしまう自分がいて、我ながら驚いています。2.3 年前は「雑巾も絞れない、使ったことがない学生が増えているなんて」と嘆いていた私でしたが、慣れとは怖いものです。

今は安心・安全の為に必要なことではありますが、**「便利さに流されないようにする気持ちは忘れないようにしよう」**と思った時期でもありました。

ゆりの樹幼稚園の水道の蛇口はわざわざ、ひねって水を出す形式にしています。石鹸も手を使って泡立たないといけないように、プッシュ式は使っていません。もうすぐそこまで、様々なことがロボットにとって代わられる時代が来ています。

だからこそ、人間にしかできないこと、集団教育の中での、人と人との関わりと、めくもいの中でしか育まれない、育ちの姿と謙虚、正直、感謝、感動の心を育て、柔軟に、勇気をもって自己決断できる、自立した大人に育つ土台の教育と身体能力(基本動作と基礎体力の向上)を大切に過ごしていきたいと思います。園児達の笑顔と共に・・・

